

鞠智城跡

鞠智城は、7 世紀後半に大和朝廷が唐や朝鮮半島の新羅の侵略から日本を守るために築いた防衛ラインの一部で、丘の上の大きな城であった。前線から遠く離れたこの砦は、いざというときに物資や人員を調達するための補給基地、訓練施設であったと考えられている。また、8 世紀初頭まで大和の支配に抵抗した南九州の隼人に対する警備にも使われた可能性がある。

663 年、唐と新羅の同盟は、長い間大和政権の同盟国であった朝鮮半島の百済を滅亡させ、日本だけが唐の勢力に対抗するために残されたとき、朝廷は大陸からの差し迫った攻撃を恐れたのである。日本海を渡ってきた百済の士官や技術者たちは、敵が当時の首都であった飛鳥（現在の奈良県）に向かうであろう九州や瀬戸内海沿岸に、朝鮮式山城を建設するために招集されたのである。

鞠智城は百済の難民が土や石を積み上げて築いた城の一つである。肥沃な菊池平野が見渡せ、そこから大量の食糧や物資を調達して、丘の上の倉庫に備蓄することができた。これらの倉庫や見張り台、守備隊が置かれた約 55 ヘクタールの中央部には、3 つの狭い谷にある門からしか入れないような厳重な要塞が築かれていた。総面積 120 ヘクタールに及ぶこの遺跡からは、72 棟の建物の基礎が発見されている。

しかし、唐・新羅の侵攻はなく、鞠智城は次第に平時の貯蔵施設になり、10 世紀半ばまで使用された。現在は公園として整備され、穀物倉庫、兵舎、八角太鼓櫓などの建物が復元されている。展望台からは城内を見渡すことができ、「温故創生館」では城の歴史について学ぶことができる。